

図1 1日あたりのSIDS発症危険度

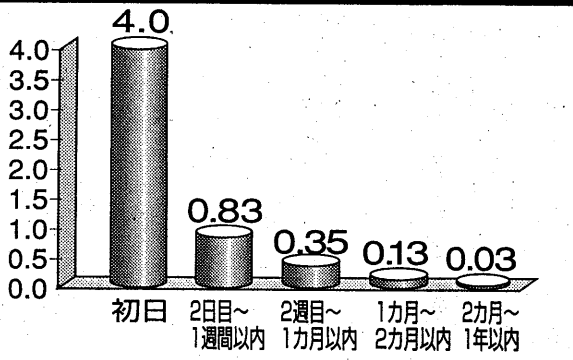
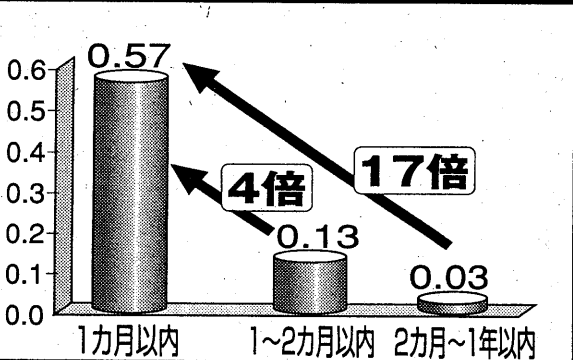


図2 1日あたりのSIDS発症頻度の比較



SIDS

乳幼児突然死症候群

さらなる減少へ

新保育指針 特に入所初期の注意促す

保育施設への「預け初め」には特に注意を、元気があった赤ちゃんが眠っている間に突然、死してしまうSIDS(乳幼児突然死症候群)に関して、3月末に改定された新たな保育所保育指針の解説書で、特に入所初期の観察を十分に行うよう注意を促す。

預け初めに高い危険性

民間の調査で浮き彫りに

保育指針は、厚生労働省が示す保育所における保育の指針で、3月末の改定は1990年、2000年に続く3度目の改定となる(施行は08年4月)。SIDSはこれまで元気があった赤ちゃんが、事故や窒息ではなく、眠っている間に突然、死んでしまう病気。06年には全国で194人の赤ちゃんが亡くなっている。乳児の死亡原因の第3位に行きまわっている。

従来から、保育指針解説書ではうつせ寝の危険性とその対応について指摘してきたが、今回の改定で特に入所初期の観察を十分に行うよう書き加えられた。その内容は、論文「保育指針の初期のストレスとSIDS危険因子の関係について」としてまとめられ、雑誌「小児保健研究」第85巻に掲載されている。中村さんと伊東さんは、保育施設の預かりからの時期にSIDS発症の危険性が高くなることについて、過去15年間、第9回SIDS国際会議で報告された。

分析の結果、発症時期は「初日が4人」「2日目~1週間以内が5人」「2週間~1か月以内が8人」「1か月~2か月以内が4人」「2か月~1年以内が10人」で、31人中17人(54.8%)が預かりから1か月以内の発症だった。SIDSの発症数を当日日数で割ると、1日当たりの発症危険度を示したのが「図1」だ。さらに預かりから1か月以内の「1か月~2か月以内」「2か月~1年以内」で1日当たりの発生頻度を比較したのが「図2」で、1か月以内の危険度は1か月~2か月以内の4倍、2か月~1年以内の17倍にも上り、預かり初期のSIDS発症が顕著に多いことが分かる。

環境変化が発生高める



人間の赤ちゃんは大きな頭脳を持っているために生理的に早産で生まれるので、眠っている間に呼吸が止まることがあり、SIDS発症の引き金となります。うつせ寝や養育者の喫煙などは

幸いSIDSの発生頻度は大幅に減少していますが、近年、保育園に預け初めの数日間の赤ちゃんの生活環境の変化が、SIDSの発生を高めていることが知られるようになってきました。母親が働くのは時代の必然であり、保育施設の利用が避けられず、保育施設の利用が避けられず、高まるのは預け初めの数日間であり、その間の注意が大切である事を、子育てに関わる者すべてが認識する必要があります。

公明推進のキャンペーン実施から10年

公明党の推進で、98年6月から国のSIDS予防キャンペーンが開始され、今年でちょうど10周年となる。キャンペーンでは特に、毎年11月をSIDS対策強化月間とし、①仰向け寝にする②できるだけ母乳で育てる③周囲でたばこを吸わない④3歳を広く国民や関係機関に周知してきた。



死亡者数は着実に減少

国は01年から10年間でSIDSの死亡率の半減を目標に掲げている。預かり初期の対応の強化で、赤ちゃんが突然死するという悲劇が、大きく減少することを期待したい。

望まれる調査研究の充実

今後の課題としては、SIDSの予防を強化する観点から、預かり初期のSIDS発症の危険性に関する国や公的機関などによる調査研究の充実が望まれる。公明党の古屋純子衆院議員は07年11月16日の衆院厚生労働委員会「SIDSの予防」で、この調査を早急に行うべきと訴えた。また、SIDSに関するSIDSが保育園などの預け初め